

斜里のアイヌ民族マキリ鞘

戸部千春

〒090 北見市錦町181番地の3 北見市立北光小学校

小稿は斜里町立知床博物館が収蔵展示しているアイヌ文化伝統の民具のうち、マキリ（小刀）とマキリシリカ（小刀鞘）を実測図で紹介し、形体と文様意匠について記述するものである。あわせて、近世末以降のマキリシリカの形体変化も概観していくことにする。

図2. イナウケマキリ 213×31×14mm

アイヌ民族の男性が神事に使い、信仰対象となるカムイ（神霊）に贈り物とするイナウ（木幣）を製作するための専用小刀である。金属の刀が、やや湾曲する形状に特徴があり、本資料も刃部の切っ先は、中心線から右側に約5mm偏位している。イナウケマキリの使用に際しては、刃部の切っ先に形状を整えた小木片を装着し、マキリ刃部の滑り止め防止と使用者のけが防止の用を果すようにしているが、必要に応じて作られる性質の物であって、本資料にも付属してはいない。又、その形状の一例は萱野茂『アイヌの民具』1974に図示されているが、道内統一規格ではなく、私の実見においても径20mm長50mm内外の円筒形木枝片を用いている例もあった。材は柳が選ばれるようである。本資料の刃部は「右刃」である。使用者が右手にこのイナウケマキリを持ち、刃部を手前に向けてイナウとすべき木材の表面を引きかく際には、刃の右側への湾曲は手振れ防止、滑り止め防止の機能を高めるに十分であるだろう。

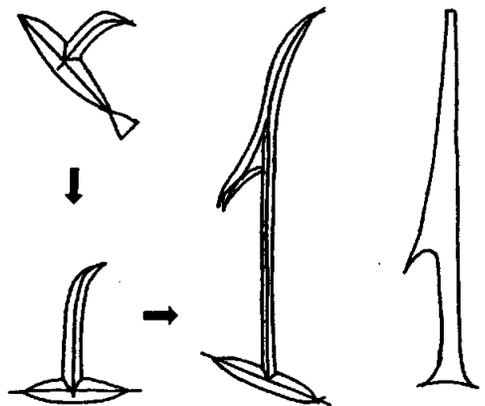
刃部は、柄への付け根から10～35mm付近にかけて細っている。この部分の使用頻度が高く、その為刃を研ぐ回数が著しかった事によると判断できる。

木柄は柄尻近くの腹部が台形状に挟られている。私はこれと同一の挟りがある柄を持ったマキリを使用した経験があるが、刃部の方向を持ち替えて彫刻作業の仕上げ工程にかかる時には、この挟り

部分に右手の小指が掛り、使い勝手を高める効果を認めることができた。

木柄の右側面には刻線文でアシベ（鯨の背鰭）が配される。このイナウケマキリ使用者の所有印としてのシロシであるよりも、神事に深く関わる道具の性格を考慮すれば、使用者の男系祖先神を象徴するエカシイトツバ（祖印）である可能性が高いのではないだろうか。斜里と網走の海岸部地域集団は、近代までもオホーツク海の海獣狩猟とその儀礼の文化伝統を保持していた事は、藤村久和他『民族調査報告書Ⅲ』1974北海道開拓記念館などの報告で明らかである。とすれば、このアシベの刻文も、このイナウケマキリによって製作される沖の神に捧げるイナウと無関係でありえないだろう。

木柄の左側面にも刃部に程近い位置に刻線文が配される。私は、これに似た刻線文を東京国立博物館所蔵の樺太アイヌ民族のマキリに指摘しておきたい。（佐々木利和編『東京国立博物館図版目録



レブンカムイイトツバ
（沖の神=鯨・神印）
の基本形

斜里町立知床博物館所蔵
イナウケマキリ柄の刻文

図一

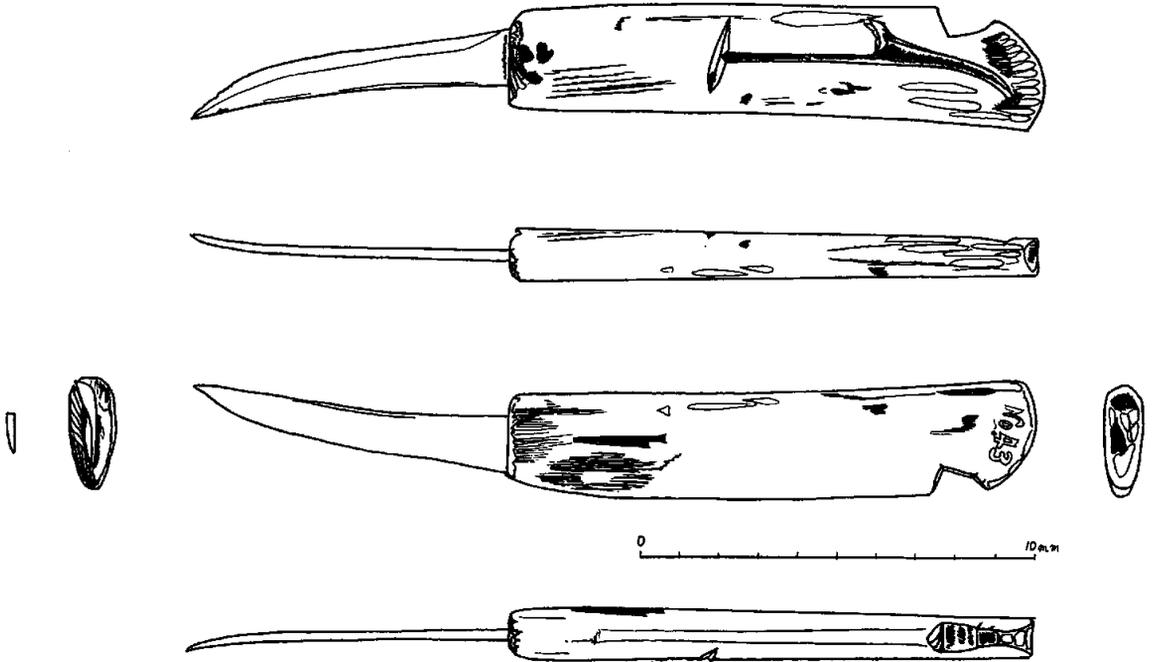


図-2 イノウケマキリ (213×31×14mm)

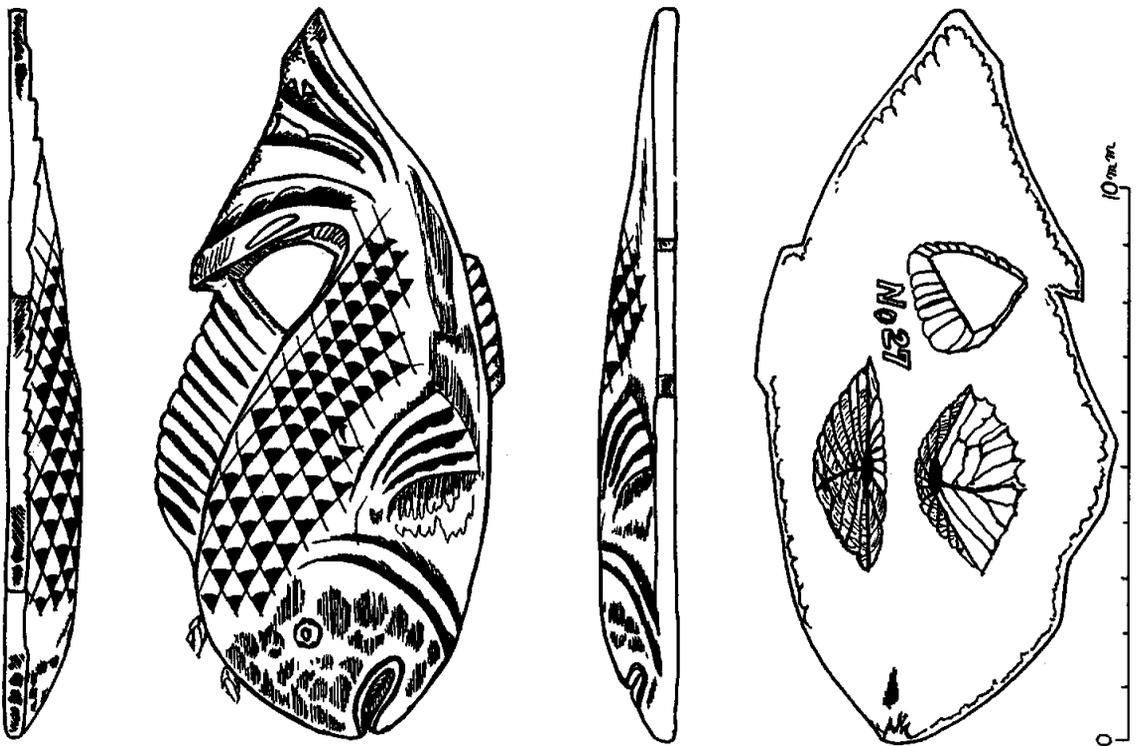


図-3

・アイヌ民族資料篇』1992の p.183に載る資料)。
当地域のアイヌ文化伝統と樺太アイヌ文化伝統は墓標形式の類似が河野広道先生により指摘されていた。信仰の根幹部の類似は注目に値しよう。

図4. マキリ木鞘 173×77×23mm
付属品：木製魚型根付け 132×62×12mm
下げ紐

木製のアイヌ民族マキリ鞘。器面のほぼ全面に刻線文による文様が配されている。

意匠の主体部は和人の『家紋』の模写となる。右側面は『丸に剣片喰』左面は松前家の『丸に四ツ目菱』。交易や労働代価としてアイヌ社会に受容された漆器の文様が規範であったろうか。神霊が宿ると観念された漆器の霊力を、己が木彫品に帯びさせる意図さえ偲ばれる。

鯉口付近から鞘尻まで、二本ずつ三組の『擬縄絞め付け帯』文が器面を周回する。近世アイヌ文化時代は、松前藩を窓口とする幕藩体制の政策によって、アイヌ社会は金属利器が慢性的不足だった。木鞘内部を穿つ道具が無い時、二ツ割した木片を穿った後、貼り合わせて紐や桜皮で絞める製作法が最善であったろう。そうした鞘の外形が典形化した姿が、近代以降のマキリ木鞘の文様意匠に伝えられたものである。紐の右繕り左繕りの別さえも意匠に加味して美しい工夫が認められる。

中央部区画の、『家紋』を囲む地文部分は器面を2mm程削平し、そこに刻線文の斜行格子文を配している。一般例では切線格子文内の鱗文を削出する個所である為めづらい。文様形式が一段古い事を示すものだろう。この事は、切線格子内鱗文を持つ付属の木製魚形根付けの製作が、鞘より新しい事を意味する。本資料にマキリ本体が欠ける事実と合わせて考えてみよう。アイヌ民族の葬制に、マキリは副葬品に不可欠であったようである。思うに、鞘のみは縁者に伝世され活用されたのではあるまいか。私が実測した約百本の資料では、鞘だけの物やマキリ本体の木柄文様意匠が異なる例が半数を越えた。本資料根付け製作は、切線格子内鱗文が開発された明治初期以降であり、アイヌ文化伝統の具象文禁止よりも和人吉祥文の『鮎』を受容した事実を明らかにしている。文化の伝承と変容のありようを示して興味深い。

鞘尻には水抜き穴が11×3mmで穿たれる。細か

な細工を可能とする道具を使用できたのであろう。

二ツ割りせぬ一体構造の木片を穿ったアイヌ民族マキリ鞘は、その出現の初期においては鞘の腹部を細長く穿ち、そこを窓口にして内部を彫り込む手法が開発されていた。器面を飾る切線格子内鱗文の意匠を採用しながらも、腹部彫り込み溝を有す鞘も幾つか存在する事は、その技法が一定期間継続した事をうかがわせる。本資料は、これら二要素の並立交替期に製作されたものと言える。私は明治中期を、想定している。

意匠刻文は右顧左眎せぬ整然とした秀作である。

図5-1. マキリ本体 木柄部分 120×40×14mm

木柄に装着された刃部本体はステンレススチームを磨いた物であり、マキリ製作時の原刃ではありえない。その形状が列島北辺の漁業労働者が使用する『鯖裂き(サバサキ)』マキリに由来する事も、本『アイヌ民族マキリ』と、なじまない。

文様は磨滅が著しく、長期使用を物語っているし、木柄はマキリ使用時の荷重によって脊梁部にひびが走っている。破損は柄頭に著しく、木綿細紐を幾重にも巻く補強は、継承者の愛着を偲させる。

柄の彫刻文意匠は曲線文で区画化された内部を①斜行刻線文、②切線格子内鱗文の二種の刻文で埋めているが、曲線輪郭の交わる突起内には小さく、青海波文に由来する刻文を配している。柄頭近くには『擬縄絞め付け帯』が器面を周回する。

図5-2. マキリ柄装着鞘 298×72×25mm

木製のマキリ鞘を製作する技法が、一応の完成を見た段階以降の物である。その理由は、
①二ツ割りしていない木材を穿っている。
②鞘の腹部には、縦長の溝が彫り込まれていない。
③鞘尻の「水抜き穴」は12×2mmと極めて細い。

しかし、木彫を容易にする為の金属利器が身近に入手しうる近代末期は又、それを十全に用いて最良の木彫民芸具を生み出す技術を維持する事を困難にしていた。本資料の技術の未成熟さ、むしろ退化は明らかであろう。文様意匠の根幹は、図2で示した鞘の意匠系譜上にあり、和人の『家紋』を中心にすえるものである。しかし円の内部に配された十弁花文はその中心が著しくずれており、阻雑な描写との印象を与える。菊花文を模写したパスイ(捧酒箸)の例から推して、これも菊花文

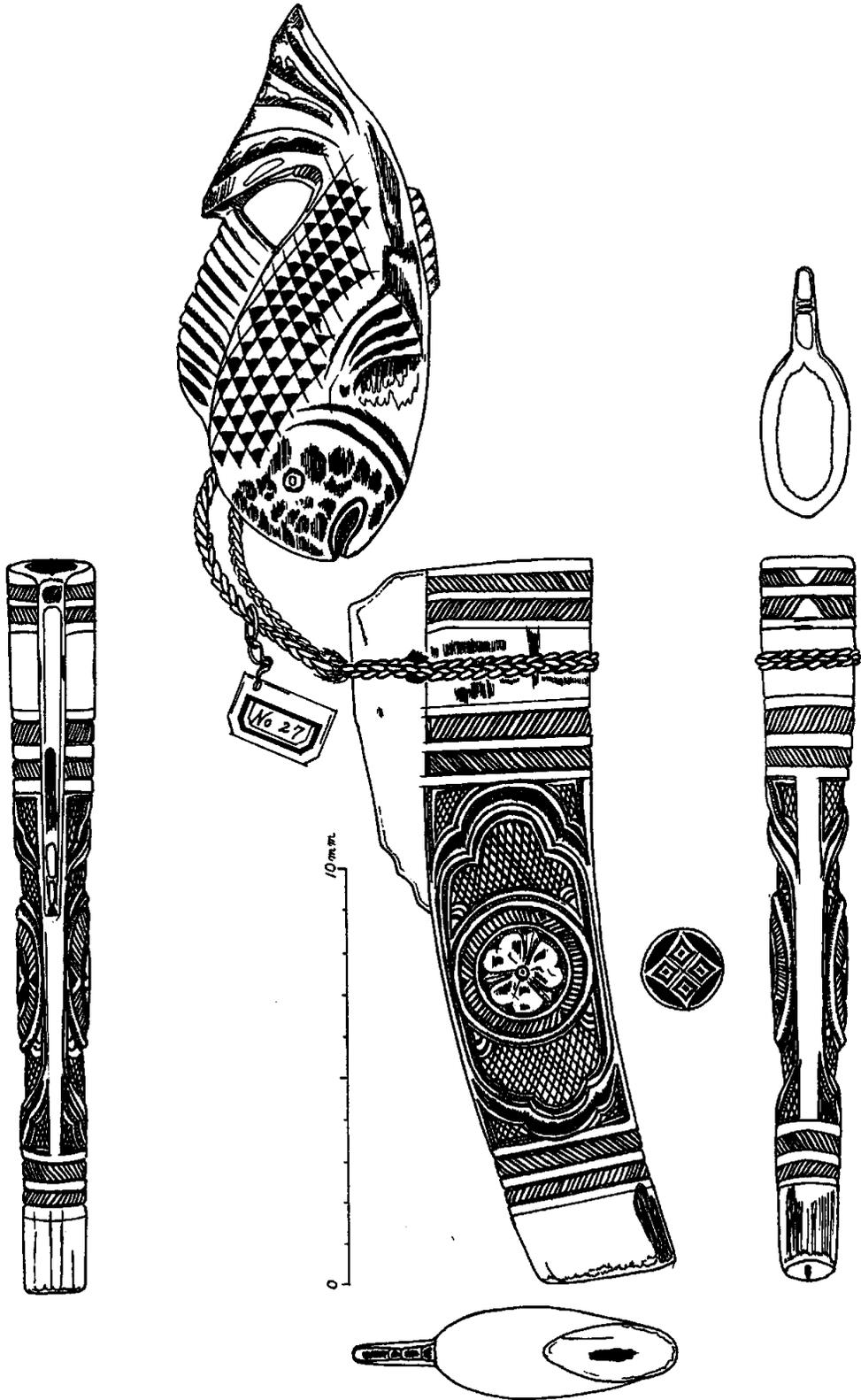


図-4 マキリ木靴 (173×77×23mm)

と思われるが、判定は難しい。切線格子内鱗文が整った美しさで彫刻された事と対照的である。

鯉口付近には一本の擬縄締め付け帯、そして鞆尻近くには二本の擬縄締め付け帯が隣接して一組の帯として配される。この意匠は先の図2の鞆と類似しており興味深い。斜里という限定された地域内での伝統の根強さを思わせる部分であろう。

私は本資料の製作時代を、『大正期』から『昭和前期』の約30年間と仮りに考えてみたがどうか。資料のバックデータが残されている事を期待したい。しかし又、私が想定した時代幅の中では、道内各地のアイヌ文化伝統が「近代化」との多様な緊張状態の中で華麗な民族芸術を開花させた事も想起されるのである。例えば女性の手技術は白老から日高を含む地域で『カパラミブ(白布切抜置文木綿衣)』と後々呼ばれる衣装が技法的に完成していったのだった。日本近代に強制編入され、文化伝統は急激な変容をとげる時代だった。本資料の強固な伝統と乱れの混在は興味深い。

下げ紐は、二本の木綿紐を鞆の頸部に周回させ紐穴を廻して四本取りとして纏め、三個所で結び目を置いている。現存する他の資料では、四本を組み紐化して周回させ、紐穴以降はそれらを新たに八本取りの組み紐とするものがある。本資料はいわば「略式」の下げ紐であるが、使用者が腰帯(ベルト)を貫通させて吊り下げるに十分な条件を備えている。四本取り上半分の痛みは、こうした使用法に由来するものではなかろうか。

※

アイヌ民族マキリの鞆は、現存する資料では皮革製の樺太アイヌが使用したイナウケマキリ鞆を祖形として形状を典形化し発展したと言われる。より北辺に隣接する諸民族は樹皮製鞆も用いた事から、古くはアイヌ民族もそうであったろう。また、中空にした鹿角を用いた鞆も現存する。私は常呂町発掘のオホーツク文化遺物として、鉄針を納めた骨製品を実見したが、それがアイヌのチシポ(針入れ)の祖形たるにとどまらず、金属利器の納入器としての骨角器と認識を明確にしている。

鹿角を部品とするマキリ鞆は北海道地域でも製作された事は、発掘品のみならず口承文芸でも明らかであり注意しておきたい。鹿角部品併用木鞆は細身である。又、角材の性質上その製作される鞆は、断面が隅丸方形に近い円形となる。北見市・

妻沼コレクションの青海波文と曲線鱗文を意匠とする木鞆こそ、その形状を受け継ぐものであるだろう。

これに対して、皮革を起源として典形化した木鞆の断面は卵型になっており、^{しが}違いが明瞭である。

鞆や柄の器面を飾る彫刻文様に着目すると、古形式ほど幾何学的な直線文と曲線文との併用のみで埋められている。斜行する刻線文は、アイヌ文化の母体となった擦文文化の土器を飾る文様が起源とみなしてよいだろう。擦文期の木製器表面にも、金属利器によるこのような刻線文様が埋められていたと私は推定するものである。

一搬に「鱗文」と呼称される「切線格子内鱗文」は、近代初頭に技法が開発されたと考えられている。私は、それが多様されるバスイ(捧酒箸)ではなく、マキリ鞆こそ発祥の場であったと考えているがどうかであろうか。(1993. 2. 4)

※

小稿を成すにあたっては、私が実測図を描く事を承諾して下さった金盛典夫・斜里町立知床博物館長の御好意に深く感謝するものである。

網走市立郷土博物館の和田英明、米村衛両学芸員の御教示にも感謝する。

網走市・武田政治氏は、貴重な資料の数々を私の実測図製作研究に利用させて下さった。

そして、北見市・妻沼浩氏のアイヌ民族民具コレクションの実見が、私の研究を可能にしたのであり、最大の感謝を申し上げるものである。

※

(付記)

小稿の脱稿後に、東京大学常呂研究室宇田川洋先生から、アイヌ民族文様の起源探究においては、擦文文化のみならずオホーツク文化期の骨角器や木器の彫刻文様にも注目するよう、一例として次の文献～武田修他編『栄浦第2遺跡』1992常呂町教育委員会、～を紹介された。この報告の第45号竪穴出土の「ムシロ編み機」とと思われる木製品には、私が別稿『東アジア列島北辺の直状小刀鞆(トカプチ第7号所収)』1993、で示した「擬縄締め付け帯」variationsの内、二種が施文されているのだった。(1993. 3. 23)

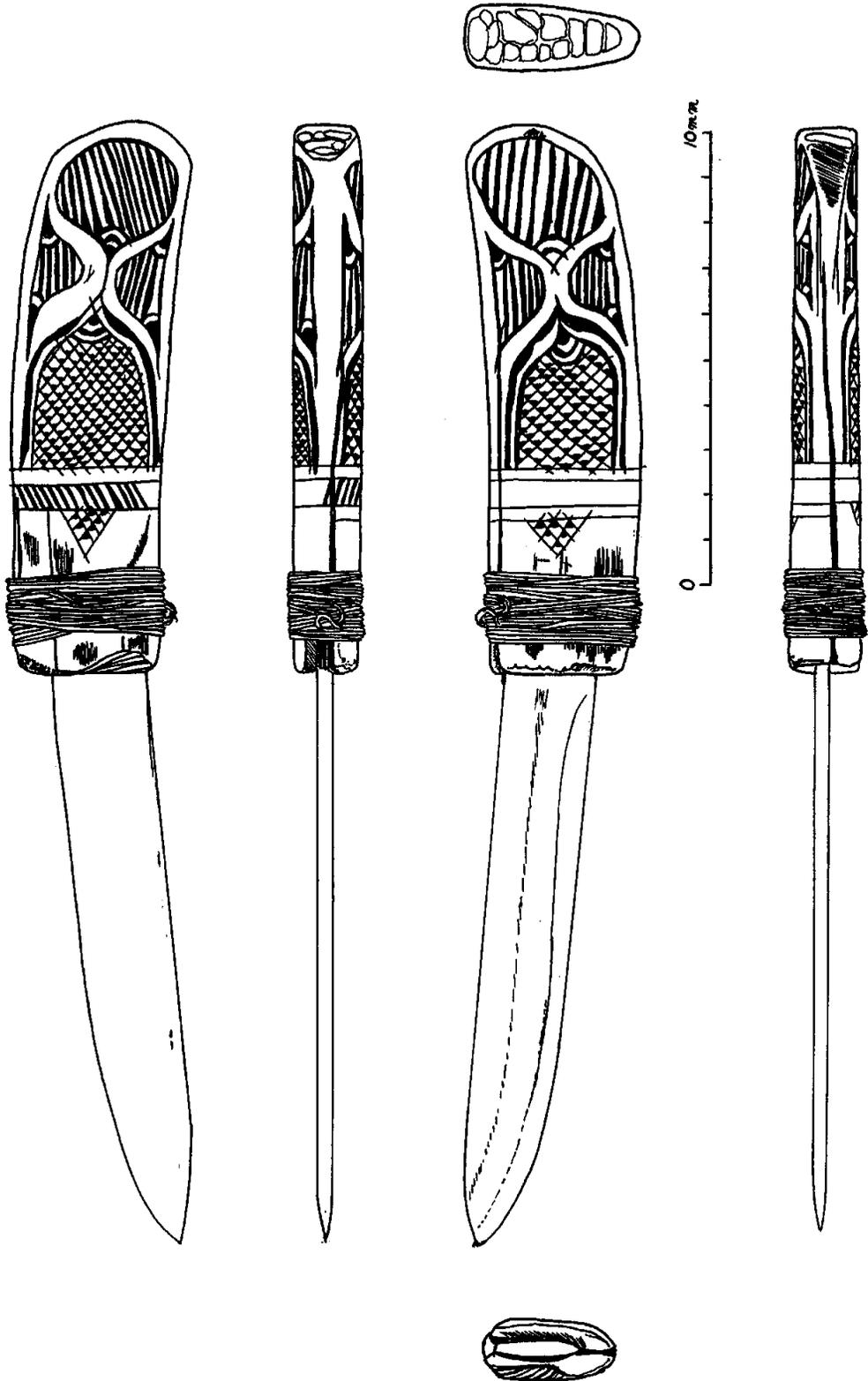


図5-1 マキリ本体 (木柄部分120×40×14mm)

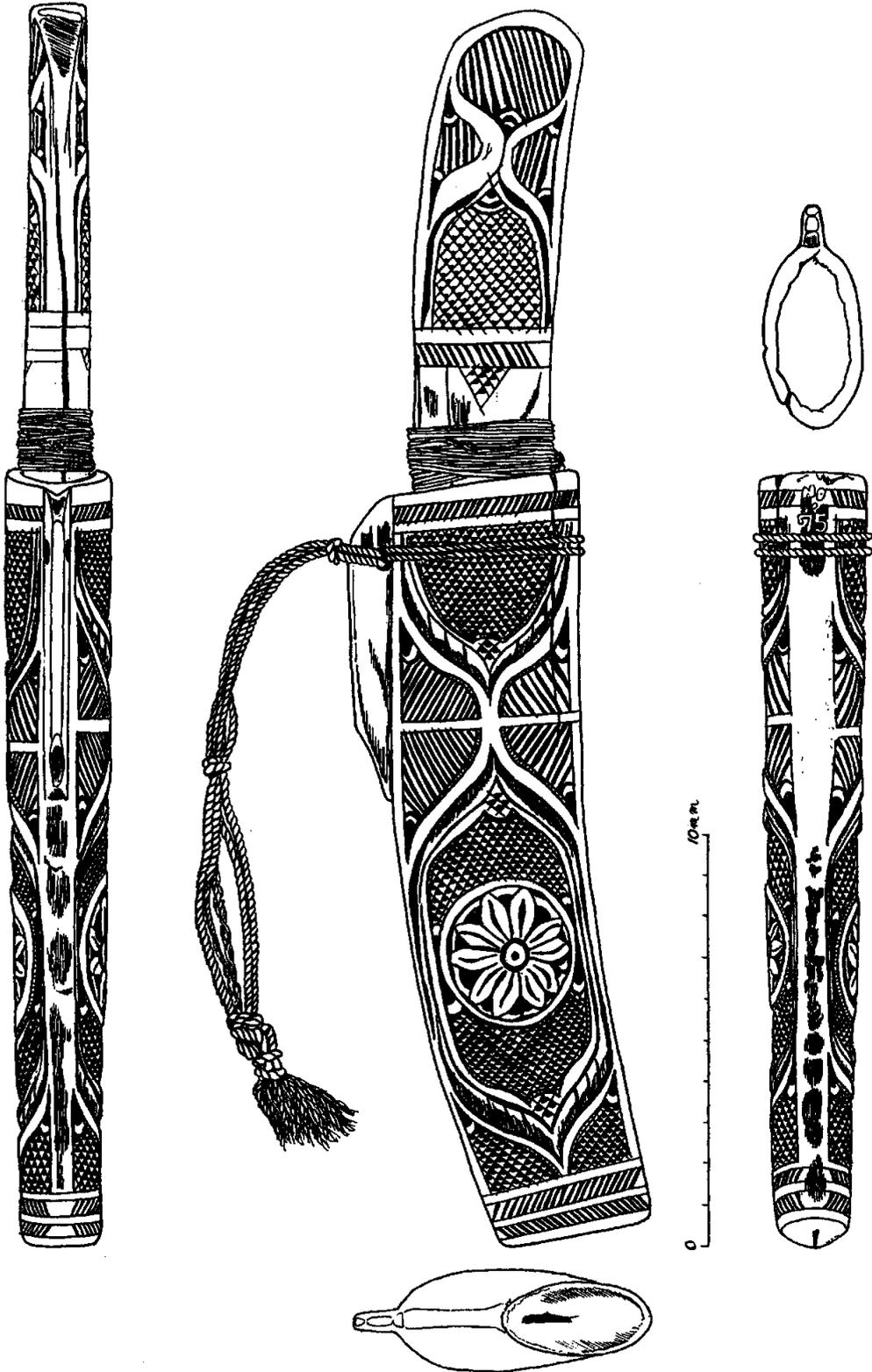


図 5 - 2 マキリ柄装着鞘 (298×72×25mm)

